
壊れかけの箱

紅華蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壊れかけの箱

【Nコード】

N3114I

【作者名】

紅華蝶

【あらすじ】

僕は五月雨^{さみだれ} 如月^{さつき}。人間とロボットの共存を果たした世界からの物語をみんなに伝えたいと思う。僕は周りから変人と思われるらしい。そんな僕に突然の出会いが！この出会いが僕をどの道に連れていくのか、まだわからない。僕がわからないのだ。だから誰にもわからないだろう。ただ少しづつ、僕の歯車がうまく噛み合わなくなっていくのを感じていた。愚かな僕の行動を前もって教えてくれるものはないものだろうか？まあ今しばらく僕とつきあって欲しい。くだらない物語と一緒に眺めようじゃないか！

第一章 突然の出会い

2015年 月××日。

そこは、人と宇宙人が共存する世界。宇宙旅行など当たり前の世界。人のやることは何も無い。

なぜなら、ロボットが全てをやってしまう世界だから。

だがそんな世界に疑問を抱いている者がいる。誰かって？この僕・

・五月雨さみだれ 如月さつきだ。正直この世界は退屈だ。何の変化もなければ、

何の冒険もない。つまらない世界だ。そして、学校の教えは・・・

「何の変化も無いのが一番良いことなんだからね？全てはロボットに任せておけば大丈夫だから！」

だそうだ。それが正しいことなのかは判断するのは大人達なのだろう。だが、大人は常に正しいことを導き出せるのか？分らない。

何が正しいのか。この世界に違和感を覚えるのは僕だけなのだろうか？

だが、この違和感を口にしても誰にも相手にもされない。従順すぎるのだ。みんな・・・。

そんなことを考えていたら、いきなり後ろから衝撃がきた。気がつくとも天地が引つ繰り返っていた。いや、引つ繰り返ったのは僕のほうだ。

「誰かと思ったら変人如月君じゃないか！」

その言葉とともに金髪の頭が目に入った。

「いつてー！」

なにするんだ？こいつは！今日に限って！ついてない・・・。しかもよりによって生徒の利用率が一番高い南廊下のご真ん中だ！

すると向こうからロボットが近付いてきた。

「ダイジョウブデスカ？」

「大丈夫！あいつをばこって終わりだ！」

売られた喧嘩は買う主義だ！勝てたためしがないが・・・。今日

こそぶちかましてやる！と、意気込んだまではいいのだが、奴は僕の倍は体重がある。飛びかかったら当然のことに様に押し返された。しかも余裕の表情で

「へっ……。いい度胸だ。」

とか言いやがった！この野郎！覚えてるよ！

言い忘れていたが、この妙に絡んでくる奴は瀬田せた誠まこと。学校じゃ

喧嘩だけは一番だろう。頭の方は相当やばいらしいが……。

「ああっ？テメエ！頭やばいってどういうことだよ！」

「……？何も言っていないんだけど！人の頭の中勝手に覗き込むなよ！ストーリーカー容疑で訴えてやる！」

「だっってお前わかりやす過ぎ！頭いいのにそーゆーとこ馬鹿なんだよな……。」

褒められてんの？けなされてんの？意味わかんね！

「そりゃけなしてるほうでしょ！」

ブツチーン！僕の頭の中で何かが切れた。

「お前！何様のつもりだあ！いくら人より洞察力が優れているからって、調子にのんな！」

気がつけば誠の顔を殴りつけていた。周囲の女子から「きゃー」と悲鳴が上がる。はっ！と周りを見渡せば、野次馬がぞろぞろと集まっていた。

「いいぞ！やれやれ！殴り返せ誠！」

闘争心を仰ぐようなこと言わないでくれ！そう思って、恐る恐る誠を見たが、なぜか当の誠は何が起きたのかわからないという表情をしている。と思ったら次の瞬間急にアハハハ！！と笑いだした。

「お前いいわ！最高！俺殴ったのなんかお前が初めてだわ！よし！お前にする！俺の一番弟子！」

「……？？？はあ？」

てつきり殴り返されるとばかり思っていたので拍子抜けしてしまっ

「何？一番弟子って？」

「最初の弟子のことだよ。そんなこともわかんないの？」
「ブチブチブチ！」

「お前に言われる筋合いは無いわ！だいたい誰がお前の一番弟子に
なんかなるか！」

「しょうがないから二番弟子でもいいフガ！」

言いかけた誠がウザくて、つい口を塞いでしまった。

「もういい！てかもう授業始まるから、じゃあ！」

そう言い残すと鞆をひつつかんで逃げるようにその場を後にした。
階段の踊り場まで全力疾走すると、手すりに寄りかかった。

マジ疲れた！こんなに走ったのは久しぶりだ。それに僕の教室は
三階。一組〜七組まであって、七組だけ三階なのだ！いつもこのこ
とに理不尽を感じ得ない。だいたい、何でロボットも宇宙人も共存
しているのに、文明も発達してきたというのに、なんでこの学校に
はエレベーターもエスカレーターもないんだ！まったくもって意味
不明！そりゃいい運動になるとは思うが、そのせいで授業におくれ
るようでは全て水の泡じゃないか！

それにこの学校にエレベーターが無いことは、前からかなり問題
視されている。いまじゃどんな田舎校でもあるというのに、この進
学校がこれでいいのか？

またまた言い忘れていたが、この学校は今や東京よりも重大企業
が集まりつつある日本一の情報機密県の一つ、長野県だ。この県に
なぜこんなにも機密情報機関があるのかは分らないのだが、考えら
れる可能性としてはアメリカ（この頃になると、アメリカとブラ
ジルが一つの国になった）への目くらましだろうと囁かれているの
だが、真相は分らない。

「で？さぼり〜？貧乏器用な如月君？」

後ろから本当に急に声がした。

「うわあ！」

驚いて後ろを見ると黒髪のストレート、袴をはいている同年代の少

女が抱きついてくるところだった。

「うっわああ！」

思いつきりよけると、少女はガン！と凄い音とともに壁に激突した。

そりゃこんな狭い踊り場じゃあね……。

「なんで避けるのよ！いつたいわね！」

はあ……。そろそろ授業でなきや。でもこの少女誰だ？良く見たらメツチャ美少女じゃん！可愛いなあ。痛がって怒るとこ超可愛い？

じゃなくて！こんなこと考えているのがばれたら大変なことになる！

「僕もう授業に出たいんだけど！君誰？こつ見えても僕は風紀委員長なんだぞ！」

「へへ、私より授業の方が大事なの？」

したから上目ずかいでこつちを見てくる！さっきまであんなに怒っていたくせに！

「あ・た・り・ま・え！何で名前も知らない奴の事の方が授業よりも大切なんだよ！」

「じゃあ、名前教えたらいいの？」

「そういう問題でもない！いいから君は家に帰る！関係者以外校舎内立ち入り禁止！」

「ひどい！私この学びやの生徒ですが、なにか？ただ単に登校拒否だっただけです、な・に・か？」

居たか？そういえば二組の公家くげ 飛鳥あすかって奴が学校に来てないと聞いた気がするが……？

「もしかして、公家 飛鳥さん？」

第一章 突然の出会い（後書き）

あとがきというものを普段読みも書きもしていない紅華蝶でございます！珍しく書いてみます！まずはじめに・・・？そうそう！ここまでご愛読していただき、有難うございます！これからもよろしくお願ひします！緊張！なんでアトガキで緊張すんねん！もっと本文に緊張感を漂わせる！とか突っ込みどころ満載の私ですが、今後ともどうか！

飛鳥の秘密（前書き）

なんでもやっつけてしまうロボット世界に飽き飽きしていた僕、五月雨さみだれ
如月きさらぎはある登校拒否少女、公家くげ 飛鳥あすかに出会った。その少女には
とんでもない秘密があったのだ！

飛鳥の秘密

「公家 飛鳥さん？」

「・・・そうだけど、なんで知ってるの？」

いや、君も僕のこと知っていただろう！その方が不思議だ。飛鳥みたいな登校拒否ならまだしも、僕はあくまで、一般の庶民だ。その僕を、17年間会ったことも、顔を見たこともないであろう僕のことをなぜ知っている？だが僕は質問を質問で切り返すのは邪道だと思っっているので、とりあえず答えとこう。

「僕は記憶力はいいんだ。それでももって今まで見たことのない奴といたら、登校拒否している奴くらいだろう。」

「でも登校拒否してるの私だけじゃないよ。他にも、1組の山村^{むらやま}草太君^{くさうた}もそうだし、6組の葛西^{かさい}好子^{よしこ}さんだって！」

「・・・はああああ。」

「なによ！そのため息！頭にくるなあ！」

「お前はアホか！」

「だから、何ですよ！」

「村山は男だし、葛西は自主退学してるだろうが！しかも、僕はほとんどの生徒に会っているし、一回会えば顔くらい覚えられる。そのほとんどに二人とも入っているんだよ！お前くらいだ、入っていないのなんて。」

パチパチパチ！

しけた拍手音が階段に響く。もう皆はとっくに授業中だろう。チャイムはこいつに気を取られているうちに鳴ったのだろう。

そんな僕とは裏腹に飛鳥は興奮している。

「すごい！名推理！これからは探偵如月君って呼ぶね！」

「なんで探偵なんだよ！そこは名探偵にしとけ！じゃない！本当に五月蠅い！頼むからやめてくれ。そして、僕を授業に行かせてくれ。」

「・・・。」

正直授業自体にはあんまり出たくはないのだが、こいつといると異様に疲れる。ならまだ授業の方がまだというものだろう。しかし、こいつをここに置いて行ったらいったで、余計めんどくさいことになりそうだしなあ。

そうだ、こいつが邪魔なら家に帰してしまえばいいんだ！その方が、こいつといて丸1日つぶれるよりは、幾分かましというものだろう。

「よし、お前家どこだ？僕が送って行ってやるうー！」
すると飛鳥の顔が急に曇った。

家族関係があんまりよろしくない家庭なのか？

「なんだよ。じゃあ、せつかく学校に来たなら授業に出ればいいだろう。」

今度は泣き出してしまった。

おいおい、勘弁してくれよ。まるで僕が泣かしたみたいじゃないか。いや、そうなんだけど……。

「どうしたんだ？お前学校で何があったんだよ？」

……。

嫌な沈黙だ。

「別に無理に話さなくてもいいけどさ。意外と楽になるもんだぜ？」

……。

すっかり黙りこくってしまった。

僕ちよつといいこと言わなかった？キザすぎたかな？

すると、飛鳥の口が少し動いた。

「……になちゃったの。」

……？

「なにになつたって？」

「空気。多分見えるの如月君だけだと思っつよ？」

「……？あれか？空気みたいに、いないように扱われたというところか？そういうイジメよくあるもんな。」

このとき僕はかなり勘違いしていた。ただのイジメだと思っていたのだ。

「違うの！本当に見えないのよ！最初は、高校入学当時はちゃんと学校にも来てたし、私の姿も皆に見えていた。そこに居るって認識してもらえていたのよ！なのに、夏休みを過ぎたら、皆に私を認識してもらえなくなった。友達や先生、家族にまで！それでも、みんなと一緒にいたくて、しばらく登校したけど、耐えられなくなった。そこに私はいるのに、いなかった。でも、家族にも見えていないから、搜索願いまで出されて、結局は行方不明の可哀そうな女の子どまり。仏壇まで作られたわ！」

・・・言葉が出ない。ただただ信じられなかった。それに、それほどの事件になっているなら、学校は何をしていたんだ？

「でもお前物体はあるんだろ？さつき壁にぶつかっていたし。それなら、望み零というわけじゃないんじゃないのか？」

しかし僕の言葉はすぐに否定された。

「私もそう思ったわ。だから、家族に手紙を書いたの。私はまだ生きてここに居ます。ただ姿が見えないだけですって！それなのにあの馬鹿家族はろくに力もない霊能力者を幾人も呼んだわ。でも、そこまでしても私は見えなかった。当然よね。どんなに力のある霊能力者を雇ったところで、私は見えない！だって私は生きているもの。でも私も正直期待していたの。少しは感づいてくれる人もいるかと思った。でも全然全くダメダメだった。それでもあきらめたくなくて、物を投げたり、椅子をひっくり返したりした。だけど家族は気味悪がっているだけ。ある霊能力者なんか、ポルターガイストが住み着いているって言ったのよ。呆れを通り越して面白かった。如月君にもあの場所にいてほしかったくらいよ。」

そこまで一気に喋りきると、一旦言葉を切った。

「じゃあ僕がお前の姿を視覚にとらえられる唯一の人物といったところか。今のところは・・・。」

すると飛鳥はこくりと頷いた。

「だから、嬉しかった。如月君と会えて。本当に嬉しかったの！」
そして彼女は笑った。本当に嬉しそうに。

ああ・・・面倒だ。本当に・・・。だが聞いてしまった以上話に乗らなければならぬ。僕は途中放棄する性分でもないのだ。このつまらない世界に変化を起こしてくれるというのなら、多少の面倒はしょうがないだろう。

飛鳥の秘密（後書き）

さてさてさて！ここまでついてきてくださった読者の皆様！ありがとうございます！感謝感謝感謝×1000000くらいです！

約束？

しょうがないから手伝ってやるかと思ったのも束の間……。すぐに問題にぶち当たった。

「どうすりゃいいんだ？」

そんな僕の決心も知らず飛鳥は妙にすっきりした顔をしていた。

「本当だね。話すと楽になったわ。これ以上如月君に迷惑かけちゃいけないし、いいよ、もう行って。」

「……！！なんですと？せつかくの僕の決心を無駄にする気ですかー！！！」

つい敬語になってしまった。

「今更戻れないだろう！そんな話を聞いた後じゃ！それにこの世界に何らかの変化をもたらしてくれる可能性が1？でもあるというなら、ほっとけないし……。協力してやるよ。」

……。

長い……。

……。

「なんか言え！」

……。

「あ……いや、なんか言ってくください。お願いいたします。」

「本当に？協力、してくれるの？」
「やっと喋った。」

「ああ。してやんよ。たとえ世界が敵に回っても僕はお前の味方だ！」

「……ブツッ！」

笑われた！今思うと顔から火が出そうだ！やばい。はずい！穴が

あつたら入りたい！

4秒前の自分ぶざげんな！なんでも未来の自分に押し付けてんじやねーよ！

とか思っていたらとんでもないことを言われた。

「如月君くさすぎ！やばい！惚れちゃったらどうしてくれるのよ？」

・・・マジ？いや惚れるのはあんたの勝手ですが、僕に責任転嫁しないでいただきたい。

だがすぐに、

「心配しないで。間違はなく、地球がひっくり返りでもしない限りないから。」

と否定されたが、

「地球がひっくり返るのつてもう12時間後にはひっくり返ってると思うよ。ということは、12時間後には飛鳥さんに惚れられるということですな！」

と上げ足を取ってやった。

「違うよお！今のは言葉のあやというか、てか地球ってひっくり返るの？そしたら私たち12時間後には宇宙に飛び出て摩擦で消滅しちゃうじゃない！」

.....

今度は僕が無言になってしまった。いけない、いけない。

「あの・・・お聞きしますが、あなたはどっやって高校入学できたのですか？」

「そんなの決まってるじゃない！¥よ。校長にどっさり積んだら、あっさりOKよしてもらったわ！」

汚い！日本はやっぱり汚い！

「どこかの校長のお陰で、日本全国が汚くなったような言い方しないでよ！」

「だから何でわかるんですかあ！」

誠の次は飛鳥か！人の心が読めるなんて誠だけで十分だあ！

「だって、如月君解りやすいんだもん。顔に出すぎというか、うん、そんな感じ！」

「人の心を覗くなあ！誠と同じことを言わんでよろしい！」
切れてしまった……。どンドン飛鳥のペースに嵌っていつてしまふ。駄目だ！

「じゃあ、飛鳥さんに問題です！人が地球が何回転しても落ちないのは何ででしょう！」

「……？もしかして私のこと馬鹿にしてる？」
いや、さつきあんたこの問題わかなかったでしょう！なに、それとも、問題にすると分かっちゃうとかか？

しかし、飛鳥の答えは平凡な僕じゃあ思いもつかないような答えだった。

「それは、地球は回転してないから！」

……。こいつ、今とんでもないことを！ガリレオはどうなる？ニ
ュートンは？今まで宇宙に関する様々な発見をいとも簡単につぶし
やがった。

「じゃあ何で太陽は沈むんだよ！」

そんな僕の質問にも……。

「そりゃ、太陽が地球を中心として回っているからでしょう？」

「違う！全くもって、違う！お前は生まれる前から人生をやり直した
ほうがいいぞ！」

「ひどい！唯一の味方君だと思っていたのに！そんなこと言うなんて！」

今度は泣く振りをした。

「僕に泣き寝入りは無用だあ！手伝って欲しければ条件がある！」

「何？」

「今回の事件が無事解決できたら、高校卒業までの間、放課後と土日僕と勉強だ」

ひいっ！

飛鳥が悲鳴を上げた。いや、そんなことで悲鳴を上げるな！

「じゃあ、いい！一人で解決してやる！後で手伝わしてくださいなんていつても遅いからね！如月君なんか、このつまらない世界で何の変化も知らずに、せっかくのチャンスも手放して死んでいけばいいのよう！」

「うっ！卑怯な！大体勉強はできた方がいいんだぞ！」

「いいのよ！勉強なんてやればできる！」

「じゃあ証明してみろよ！」

「……。わかった！私の負けよ。だけど、一抜けたは無しよ？」

「当たり前だろ？大体、僕は途中で抜けるのが大嫌いなんだよ！やるからにはとことん付き合わせてもらうからな！」

「いいわよ！」

携帯を見るともう後5分で授業が終わろうとしていた。

放課後（前書き）

これまでなんとも平凡な生活をおくってきた僕はなんとも不思議な少女に出逢った。彼女は公家飛鳥。彼女にはとんでもない秘密があったのだ。そのヒミツの謎を解くために、僕は協力することになった。めんどくさいが、何の変哲もない毎日を送るよりは、少しでも変化があったほうがいい。ところで、何故か飛鳥と出逢ってから、僕のキャラ壊れ始めている気がするのはせいだろう！・・・うん・・・きつと・・・。

放課後

僕はあれから、きつちりと2時間目から出た。

飛鳥はというと、あれから家に戻るつもりもないらしく校舎内をフラフラしていたらしい。

学校というものは面倒で、下手に休めない。もう義務教育は終わっているのだから、いいじゃないか！

とも思うのだが、ありがた迷惑に僕の両親は勉強一家だ。それだから、僕はこれまで学校を休んだどころか授業もさぼったことがなかった・・・のに・・・飛鳥と逢ってから、授業は欠席するは、一日出没気没だわ、迷惑しかかけられていない！

だけれども、あんまり憎めないというか、守ってやりたいと・・・いかん！僕は何でこんなことを考えているんだ！

とにかく！僕言いたいのは、事件だか事故だかの謎を解かなければいけないのに、時間が無いということ。

とりあえず、放課後や朝の時間を利用して調べていくしかないだろう。

そこで朝は放課後に図書館に来るようにとっておいた。

- 放課後 -

図書館に行くとき飛鳥はもう来ていた。

・・・というより、熟睡していた。

そこで寝かしておいてやるような優しい僕ではない。

「おい！起きろ！」

机に伏せるようなかっこで寝ていた飛鳥を僕は上から押さえつけてやった。

「いったーい！なにをするのよう！かみがぐしゃぐしゃになるじゃない！」

「みごとな平仮名だな。それと見事な髪型だ。記念に撮ってやろう

か。」

僕にはやけ顔が止まらなかった。

「今日一日の迷惑料だ！」

と叫び、カメラの準備をしようとするが、飛鳥に奪われた！

パシヤ！

しかも逆撮られてしまった！！

「お返しだよーん！人のこと無断で撮ろうとするから撮られるのよ！」

「僕がまだ撮ってもないのに撮るなんて酷いじゃないか！」

「撮ってはないかもしれないけど、撮ろうとしたじゃない。」

「とにかくカメラを返せ！」

「返したら撮るじゃない！」

「撮らないから返して！」

「本当に？」

「本当に。」

「ほんとのほんと？」

「ほんとのほんと。」

「じゃあ撮ったら、屋上から飛び降りてね？」

・・・こわ！

「ごめんなさい！もう二度とあなた様を撮ろうとは致しません！ですからカメラを僕にお返してください！」

「そこまで言うなら返してあげてもいいわよ？というか、あなた私が見えないということ忘れてない？」

はっ！として周りを見渡すと、全員一斉に顔をそらした。

唯一の救いは、まだ人が少なかったことくらいだ。

「もうちょっと早く言ってくれてもいいじゃないか！」

「じゃあ、さっきのチャラね。はいカメラ。」

堂々とカメラを渡されたが、他の人にはカメラが空中を舞っているようにも見えているのかな？

それはそれで恐いなあ・・・。と思いながら、カメラを受け取っ

た。

「じゃあ、ここじゃ話にくいし外でない？」

飛鳥の提案で僕達は外に出たが……。

どこに行っても人はいた。

「僕の家来る？飛鳥なら問題ないっしょ！」

と横を見ると飛鳥は顔を赤くしていた。

「なに赤くなってるんだよ！こっちまでなんか恥ずかしくなるから止めてくれ！」

「あ……赤くなんてなってないわよ。こ……これは夕日のせいよ！」

確かにアルプスに夕日が沈もうとしていた。

世界が赤く染められていく。

「綺麗だな。私誰かと夕日を見たことなんて、久しぶりだよ。」

「僕は初めてだ。夕日が綺麗なんて当り前じゃないか……。僕は

一日のうちで夕方のこの時間帯が一番好きだよ。」

そういえば、最近日が短くなってきたな。

「意外だなあ。」

飛鳥の呟きが聞こえてきた。

「意外って何が？」

「意外に素直ってことよ。どうせ如月のことだから、夕日なんて自然現象なんて当り前じゃないかと思うかと思った。」

「素直なんて初めて言われたよ。いつもひねくれ者とか変人とかしか言われてさあ。周りがそうさせたつてもあるのにね……。」

少しシリアスモードになってしまった。

「で！如月の家ってどの辺？」

飛鳥が話題変えてくれて助かった！

「もうすぐ、その角右に曲がったとこ。」

「へ〜。意外と近いんだね。」

「まーね。」

家に着くと両親はまだ帰宅していない。

「ちょうどよかった。あがってくれ。」

「ん。ご両親は共働きの？」

「そう。家にいたって仕事で、僕なんか忘れられてるよ。」

「そっか。変なこと聞いてごめんね。」

「もう慣れた。僕の部屋、2階の2番目の部屋だから、先行つてお茶でも淹れて行くから。」

「分かった。早くね。」

「はいはい。」

しかしなあ……。どうやって調べるべきなのか……。ちっともいい考えが浮かばない。僕としたことが、なんてことだ。

そんなことを考え、少し自虐的ななっていると、飛鳥が降りてきた。

「やっぱ私も手伝うよ。」

「いや、いい。もう終わったし。部屋行く。」

「何だ。せつかく手伝おうとしたのに！」

「じゃあ、お茶持って行って。腹減っただろ。なんか持ってく。」

「にかー！」

飛鳥の顔がほころんだ。

そして、適当に食べ物を見つけると、部屋向かった。

放課後（後書き）

ちよつと今回シリーズすぎました！なんかどこかの恋話かあとか書いてて思いました！次回は、もう少し展開があるといいなあ……。切実に！ではまた次回！

きっかけ（前書き）

僕は五月雨・如月^{なみだれ・きさらぎ}。僕はひよんな事から、公家・飛鳥^{くげ・あすか}という少女に出会った。驚くことに、彼女は他の人から全く見えないらしい・・・。まあ、僕は見えるのだが・・・。そんな僕は飛鳥の為に、協力することになったのだけれども・・・。

きっかけ

飛鳥が家に来て1時間以上経ったのだが、まるで解決の糸口が見つからない……。

というよりも、飛鳥はさっきから食べてばっかりだ！本当に解決するつもりはあるのだろうか？

しかし、あまりにも食欲が凄くて、止めるに止められなかった。

おいおい……このほそっちい体のどこにこんなにはいるんだあ？？もしかして、天罰が下ったのだろうか？でも食べ過ぎたくらいで見えなくなるなら、この世界の5/1の人達は見えなくなるんだろっしなあ。そんな簡単なことではもちろんだろっしけれども、どうしても分からない場合は人間は現実逃避したくなるものだ……。

そんな下らないことをけっこう真剣に考えていると、飛鳥が

「おかわり！」

と叫んできた。

飛鳥の半径1M以内には非常に健康によろしくない物が散らばっていた。

簡単に言い直すと、スナック菓子の空き袋が山となっていたのだ。その惨状を改めてよく見ると、やはり天罰が……。そう考えてしまいたくなるような惨状であった。

「飛鳥……そろそろ本題に入ろう……。」

半分以上呆れた口調で言ったのだが、飛鳥は反省の色のかけらも見せなかった。

「飛鳥！いい加減にしろ！早くしないと親が帰ってくるじゃないか！」

かなり大きい声で怒鳴ってしまった。

「わかったわよう！なにもそんなに大声出さなくてもいいじゃない。

私だってそろそろ話しようと思っただから！」

「いやいやいや・・・！口の周りいっぱいスナック菓子のカスを付けている人が言っても、なんの説得力もないですから！」

「そう言いたい気持ちを押し殺して、僕は話を先に進めることにした。」

「で？夏休み中になんかなかったのか？」

「何かあって？」

「そう聞き返されても、良い例え話など僕が持っているはずもない。会話が切れてしまった。」

しばらくして飛鳥が、何か思いついたような顔をした。

「何か思いついたのか？」

「ううん。思い出したの。理由があるとすれば、神社に行ったことかしら。あの時、何か背中が重くなったのよ。それから数日間、なまりのように背中が重くなったの。それが、始業式の二日前のことよ。」

「じゃあ、霊的な仕業なのか？」

「そうでしょうね。全くなんで私なの？あの時家族みんなで行ったの・・・。」

「なんかどこかで聞いたことのあるような・・・。」

「飛鳥の身体が、霊とシンクロしやすい身体なのかもな」

「そのようなことをチラッと小耳にたまたま挟んだことがある。」

「シンクロ？見ず知らずの霊にシンクロされるなんて、いい迷惑だわ！」

「とりあえず、その神社に行ってみるしかなくないか？ここであうだしているよりは、少しはましな情報を得られるだろう」

「でも、今よりもっとひどくなったらどうしよう・・・。シンクロしやすいなら、余計ひどくなりそうじゃない」

「僕はその点は全く心配していなかった。」

「大丈夫だよ。要は、シンクロ出来なくすりゃいいんだろ？」

「その僕の言葉には、飛鳥は少しも信用していないようだった。」

きっかけ（後書き）

なかなか話が先をみようとしなかったのですが、ようやく、なんと
が見えそうです！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3114i/>

壊れかけの箱

2010年10月28日06時59分発行